

51 警視庁の屋上

佐藤が陽かげのベンチに腰掛け寝ている。

村上「佐藤さん、佐藤さん」

佐藤、目を醒ます。

村上「ありました。あいつ、本名は立花って言うんです」

佐藤、大あくびをして起き上がるが、別に見ようともしない。

佐藤「この写真を沢山複写して貰うんだな……それから逮捕状……」

村上「僕は現場の様子も捜査方針も、まだ何も知らないんですが」

佐藤「……君があのお女上げといってくれて助かったよ……もう片づいたようなもんだ……本多を捕まえて通帳をおさえりや、犯人の指名手配って訳さ……昨日の淀橋の強盗障害事件はそいつの犯行って訳だ。おそらく間違はあるまい……黒い冬の背広……コルト……それを左手に握ってたんだ……その手は震えていたに違いない……必要もないのに泡喰あわくつぶッ放した奴だからね……トウシロウが盲滅法めくらめっぽうに押し込んだありきたりの事件だ……もつとも被害者にとっちゃ大変な事件だがネ」

村上「(震える声で) 娘さんだそうですね」

佐藤「うん、盗まれたのは四万円なんだが、結婚するために三年がかりで貯めた金でな……また、三、四年働かなくちゃならないんだ。その頃には娘盛りが過ぎちまうし、ムコさんは戦争から引き続いて十年も待ちぼうけさ」

村上「……」

佐藤「取り返してくれて怪我も忘れてないてるのさ」

村上「……」

佐藤「全く殺生なコルトさ」

村上、立ち尽くす。

佐藤「……どうした？」

村上、思いつめた顔で、

「それは……僕のコルトなんですよ」

佐藤「えッ?!」

村上「……盗まれたんです……鑑識の結果、その娘さんから出た弾と僕のコルトの弾が一致したんです。僕さえ……あんなへまやらなけりや」

佐藤、言葉がない。やがてポツンと、

「コルトがなけりや、ブローニングでやったさ」

村上、じつと遠い空を見つめている。

ズズズズ！ と腹に染み込むような遠雷。

村上「……なんだか……もつと嫌なことが起こりそうな気がするんです、僕は……」

遠くを見つめる村上の暗いまなざし。

また、ズズズズと遠雷。